

<p>教育学・心理学</p> <p>keyword</p> <ul style="list-style-type: none"> ■ 知覚経験の時間的性質 ■ 認知的侵入可能性 ■ ゲシュタルト心理学 ■ 因果性の知覚 	<p>【代表的な研究テーマ】</p> <ul style="list-style-type: none"> <input type="checkbox"/> 知覚経験の表象内容が持つ時間的性質の研究 <input type="checkbox"/> 因果性が知覚経験の表象内容に含まれるのか否かの検討
 <p>西村 正秀 Seishu Nishimura</p> <p>経済学部 准教授</p>	<p>課題解決に役立つシーズの説明</p> <p>私の専門は哲学であり、特に、知覚に関する哲学的諸問題に近世哲学史研究と現代哲学研究という二つのアプローチで取り組んでいる。現在主として取り組んでいるのは、知覚の現代哲学における諸問題であり、具体的には、「知覚経験の表象内容はどのような時間的性質を持つのか」という問題と、「因果性は知覚経験の表象内容に含まれるのか」という問題を検討している。以下、それぞれについて説明する。</p>
<p>【プロフィール】</p> <p>●略歴</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1972 年 京都市生まれ ・1996 年 京都大学 文学部 卒業 ・2004 年 京都大学大学院 文学研究科 博士後期課程 修了 (文学博士) ・2007 年 4 月 滋賀大学 経済学部 准教授 ・2010 年 イリノイ大学シカゴ校 哲学科博士課程 修了 (Ph. D) <p>●専門分野</p> <ul style="list-style-type: none"> ・認識論 ・心の哲学 ・近世哲学史 <p>業績や所属学会については、 滋賀大学経済学部 HP を参照 されたい。</p>	<p>【知覚経験の表象内容はどのような時間的性質を持つのか】</p> <p>私たちは、目の前をネコが通り過ぎていく出来事など、時間的な幅を持った出来事を知覚する。このような時間的な幅を持った出来事に関する知覚経験は、どのように説明されるのであろうか。知覚経験は、映画やアニメのようにそれ自体は時間的な幅を持たないコマの連続的な流れによって構成されているのであろうか。それとも、知覚経験自体が何らかの仕方で時間的な幅を持つ存在者なのであろうか。これはアウグスティヌスも論じた古くからの問いであるが、知覚に関する心理学や神経生理学の発展に伴い、近年再び活発に議論されている。この問いに、「知覚経験はその表象内容が時間的な幅を持っている」という作業仮説(バリー・デントンの分類に従えば、この仮説は「過去把持モデル」と呼ばれる)のもとで、運動や継起に関する知覚経験の認知的侵入可能性の検討や近年のゲシュタルト心理学の検討を通じて解答を与えることが、現在の私の研究目的である。</p>
	<p>【因果性は知覚経験の表象内容に含まれるのか】</p> <p>あなたがスーパーに行けば、さまざまな色や形や大きさをした野菜が並べられているのが見えるであろう。この時、あなたの知覚経験が表象しているのは、厳密には何であろうか。色や形や大きさをもったものが知覚経験によって表象されていることについては、誰も疑わない。しかし、「トマト」や「キュウリ」といった野菜の種類が知覚経験のレベルで表象されているか否かについては、哲学者や心理学者の間で意見が分かれる。色や形や大きさや運動などの性質は、「低次性質」と呼ばれる。一方、「トマト」などの自然種や因果性や美的性質などは、「高次性質」と呼ばれる。高次性質は知覚経験によって表象されるのかという問題は、知覚の哲学のホット・トピックの一つである。この問題について、現在私はイリノイ大学シカゴ校のディヴィッド・ヒルバート教授と共同研究を行っている。具体的には、高次性質の中から因果性に焦点を絞って、「因果性は知覚経験のレベルでは表象されていない」というテーゼを擁護している。知覚経験は継起する二つの出来事間の結合を表象することはできるが、その結合を因果的結合として表象することはない。このような主張を、知覚経験による因果性の表象可能性を擁護するスザンナ・シーゲルの議論の批判的検討などを通じて示すことが、現在の研究内容である。</p>